

中村佳穂

新しい。カッコイイ。
気持ちいい。
どんな感じ方もできる
中村佳穂の音楽

今もっとも注目を集めているシンガーは誰かと聞かれれば、間違いなく中村佳穂だ。彼女が創り出す、ジャズやヒップホップ、ソウル、エレクトロニカ、果ては民族音楽など様々な色や味が溶け合い喜怒哀楽が混ざり合った楽曲は、音楽に触れる人すべてを解き放ってくれるよう。自由奔放でありながら、一度聴いただけでハートをグッとつかまれてしまうぐらい強い。昨年発売されたアルバム『AINOU』は、すっとなじめるポップさがありつつも、その世界観はいくらでも深く掘り下げることができ、なおかつ未知の出会いも待っている宝箱のような作品で好評を博し続けている。今年7月に『LINDY』、8月に『q』、9月に『Rukakan Town』と立て続けにシングル作品を配信。秋には【うたのげんざいち2019】と題したワンマン公演を東京、大阪で開催する。彼女が口ずさむメロディー、言葉、歌のすべてが舞うように広がり音を楽しみ事の豊かさを生で味わえる貴重な機会が楽しみでしかたがない。

—『AINOU』がリリースされる前と現在では中村さんの周りは変わりましたか？

「見に来てくれるお客さんの人数がガラッと変わったので、すごく変わった感じはするんですけど、個人的には過ごし方や生活の仕方、音楽に対する考え方はまったく変わっていません。ただ、それを肯定してくれる人数がすごく増えたという感じなので普通に今までのように嬉しいです。

—新曲『q』の最後で、ゆったりとした音の流れに乗って“You”が繰り返されるのを聴いているうちに、歌詞の“You”とタイトルの『q』がとても密接なものに感じられて。あなたに対する問いかけなのか、あなたそのものがクエスチョンなのかとか、いろんな考えが頭をめぐるのも楽しかったです。

「嬉しいです。『q』の歌詞は8割以上をギターの武さん（武 徹太郎）が書いて、それを私が自分なりに解釈して変えた部分もあったんですね。もともとは同じ語感で『球』というタイトルで書いてくれたんですけど、私はダブルミーニングがすごく好きで、“もしかしたらこういう意味なのかも”というのを肯定的にとらえるような詞にしようとしているので、『球』だとちょっと限定的になりそう。もうちょっと普遍的な字がいいなと思って、“私への問いです”という意味で『q』に変えました。

—自分の歌は自分の書いた歌詞でなければ、というこだわりはない？

「そうかもしれませんね。あまり上手に言葉を紡いでいるという自覚はないので、その時その時に一番良い方法を選ぼうと思っています。いい詞になればなんでもいいと思っているところはありますね。

—自分の思いをダイレクトに歌詞にして伝える



やり方もあれば、言葉じゃなく音に託すなどいろんな表現がありますが、中村さんの音楽は問いかけでしょうか。

「その作品に対して、自分が持ちうるいい技で、できるだけいいものを作るというのがいつもコンセプトなので、それをディレクションする事が好きなんです。これまでのCDもイラストレーターの人や友人に、“こういうコンセプトで”と伝えてやってもらっていて。聴く人にどう思ってもらいたいというより、料理を作って“美味しかった？”と聞くのに近いのかな。

—『q』に参加しているミュージシャンやバンドメンバーは、中村さんが大学時代から各地でライブをする中で出会った方達ですよね。出会いを求めているところへ飛び込んでいけるのはとても度胸があるように思います。

「うーん。もともと歌う事がとても好きだったんですね。音楽は不安定な仕事だからと、親と“大学の4年間に音楽で大成しなければ止める”という約束をしていました。その中でどうしたら歌い続ける事が出来るか—自分は器用じゃないので、焦る気持ちもあったし。純粋に音楽に没頭できる人生を謳歌したいと思った時に、ライブハウスに行くしかないのかもしれないって。その頃からオリジナルを作り始めました。なので、自信を持って“これを聴いてほしい！”というよりも、“どうしたらいいの？”と思いながらずっと歌っていました。

—もともと中村さんに“歌うことはこんなに素敵だ！”と思わせた出会いは何でしたか？

「アル・ジャロウの『TAKE FIVE』が好きで、あとブラジルのエドゥ・ロボも母が聴いていて素晴らしいなって。七尾旅人さんをラジオで聴いて最初に教えてくれたのも母でしたし、大橋トリオさんもそう。最新の音楽はだいたい母から教わりました。私が音楽活動をする事で、テレビに出ない人でもたくさん素晴らしい音楽家がいることがわかって、母はとても楽しそうです。今年私が出演したフジロックにも来ていました（笑）。—物書きは歌詞の元になるものを書かれています？

「それもあってと思いますし、今回の企画の時ほとんどメンバーを呼ぼうかなとか、衣装を仕立てたいと思っているのでライブで出会ったあの人に連絡しよう、とか考えたりしていますね。いいなと思う服を着ているとライブが楽しくなるし、結局は音楽にまつわる事をしてるんだなって。そのプロセスを考える事は毎日やっていますね。

—いろんな事が近からず遠からず音楽に繋がっ

ているんですね。「そうですね。今、楽しく音楽ができていますので、あとはもっと豊かに衣食住したい（笑）」。

—10月には東京で、11月には大阪で【うたのげんざいち2019】が開催されます。どんなライブになりそうですか？

「ライブは毎回そうなんですけど、すごく楽しくやるのを念頭に置いて、会場を見に行った時に“誰がどう演奏したら楽しいかな？”と考えるところから始

めます。迎えるゲストもその日によって変えよう。東京は椅子のある会場、大阪はライブハウスで、雰囲気も違うのでそこに合わせて迎えるメンバーや衣装も考えていこうと思っています。

—バンド編成になるんでしょうか？


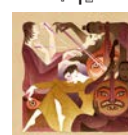
「そうですね。バンドだと大は小を兼ねるというか、ソロの時間も取れるのでたくさんの人を呼ぼうと思います。

—ソロやバンドなど、ライブの編成はどう決まりますか？

「今いるこの部屋だと、ここにこういうお花を置いたらかわいいかなと考えるみたいにレイアウトを決める感じです。“なぜ音楽をするのか”という事にも近くなるんですけど、“なぜ私はその場に呼ばれたのか”を考えるんですね。たとえば“自分のお店が何周年だから来てほしい”と言われたら、自分はこの場所でこの位置で歌うんだ、それだったら一人で行ったほうがいいとか、パーティーっぽくしたほうが幸せな空間になっていい一日になるかな、そしたら私も楽しいし…というところから考えます。アルバムもそうですけど、どうすれば一番いい状態になるかを考えながら組み立てている感じですね。

—1stアルバム『リピー塔が立つ』が発売されたのは2016年、『AINOU』は2018年11月。特に『AINOU』は2年半じっくり時間をかけて作られたそうですが、気が早いですが新しいアルバムも楽しみです。

「ありがとうございます。『AINOU』から『LINDY』までの8カ月間もあつという間でしたし、いつもあんまり作品を発表するタイミングを決めていなくて、自分がどうやれば楽しいのかを考えたり、これからどんな人に会うかによって時期が決まるという感じで…。その時期がなるべく近くなるよう精進します。」

	out now!!		out now!!		out now!!
『LINDY』		『q』		『Rukakan Town』	
					

【うたのげんざいち 2019】

10月23日（水）東京・草月ホール
11月14日（木）大阪・BIGCAT
12月10日（火）東京・新木場スタジオコースト